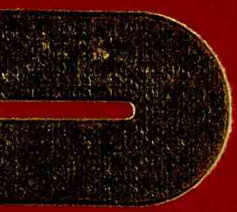

世界ミステリ全集

14

はなれわざ
ドーヴァー④／切断
死人はスキーをしない

クリスチアナ・ブランド
ジョイス・ポーター
パトリシア・モイーズ

早川書房

世界ミステリ全集　14

クリスチアナ・ブランド
「はなれわざ」宇野利泰訳
ジョイス・ポーター
「ドーヴァー④／切断」小倉多加志訳
パトリシア・モイーズ

〈検印廃止〉

1973年2月20日初版印刷　1973年2月28日初版発行
発行者　早川　清　東京都千代田区神田多町2～2
発行所　株式会社早川書房　東京都千代田区神田多町2～2
電話　東京（254）1551～8　振替　東京47799
印刷所・株式会社亨有堂印刷所　製本所・株式会社明光社
本文用紙・本州製紙株式会社
表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製
函紙・駿河製紙株式会社
製函所・株式会社佐藤製函所　定価1600円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えします〉　0397-807140-6942

目次

はなれわざ……3
ドーヴァー④／切断……311
死人はスキーをしない……509
クリスチアナ・ブランド／ジョイス・ポーター／パトリシア・モイーズについて〈座談会〉……787
クリスチアナ・ブランド著作リスト……811
ジョイス・ポーター著作リスト……812
パトリシア・モイーズ著作リスト……814

函・扉・表紙／勝呂　忠

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

はなれわざ

クリスチアナ・ブランド
宇野利泰訳

© 1973 Hayakawa Shobo

TOUR DE FORCE

by

CHRISTIANNA BRAND

Copyright © 1955 by
CHRISTIANNA BRAND

Translated by

TOSHIYASU UNO

Published 1973 in Japan by
HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.
This book is published in Japan by arrangement
with A. M. HEATH & CO. LTD., through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

はなれわざ

登場人物

ルーヴァン（ルーリー）・バーカー……新進女流作家
セシル・ジョージ・プラウト……クリストフ衣裳店のデザイナ

ヴァンダ・レイン……孤独の女
レオ・ロッド……右腕を失ったピアニスト
ヘレン・ロッド……レオの妻
エディス・トラップ……金持の独身女
フェルナンドー・ゴーメイス……オディシューズ観光旅行社の案内役
サン・ホアン大公……サン・ホアン・エル・ピラータ島の領主
署長……同島の警察署長
コックリル（コッキー）……スコットランド・ヤードの警部

1

「安全ベルトをおしめください」
可愛らしいスチュワーデスが、フォックス・テリヤのように敏捷な身のこなしで、まん中の通路を知らせて歩いた。
「まもなく着陸いたします」
コックリル警部は、いそいで窓の外をのぞいてみたが、そこにはなにも、目にとめるようなものはなかった。ただひとつ、あやうく看過ごすところであったが、みどり色の小さな地所と、その上に建っているガラスずくめの大きなビルが、機体とすれすれ、あわや触れあうかと思うばかりに、背後へさっと、飛んでいくのが目にとまった。
とつぜん、右隣りの若い婦人が、彼の肩に、顔を押しつけてきた。現在の彼の状態としては、騎士を気どって、相手の女性をいたわるどころの騒ぎではなかった。そっと身を退けて、自分自身が、身の安全を神さまにお祈りするのが、精一ぱいといったところだった。
滑走路に、ゴムのタイヤがぶつかって、大きく弾んだ。そして、もう一度、ぶつかると、はじめて静止した。
若い婦人の手が、またしてもしがみついてくるのを、彼は、彼自身血の気のひいた蒼白な顔でふり払った。波を打つ長い赤毛が、夏服の袖にまつわりつくのを、さも不愉快そうに避けているうちに、飛行機はしずかに、誘導路の方向へと滑っていった。
コックリルも慰める余裕ができて、若い婦人にいった。
「心配はありませんよ。着陸はすみました」
「飛んでいるときは、心配なんかしなかったんですけど」
若い婦人は、顔をあげて応えた。ぱっちりした青い目が、感謝をいっぱいにたたえて、彼を見つめていた。濃い化粧の下の皮膚は、死人のように血の気がない。
「畑や人家が見えだすまでは、空の上にいる気なんかしなかったんですけれど」
そういって彼女は、まだ胸がむかむかするように身震いした。とたんに、膝にあった半ダースほどの婦人雑誌がすべって落ちて、すべすべした紙質の、派手な表紙を、かしいだ床に散らばせた。女はそれを、まっ赤に爪を染めた手でひろいあげたが、片方の手は無意識に、コックリルの上

衣の袖から、自分の髪の毛をつまんでいた。
「ごめんなさいね、髪の毛なんかつけちゃって。赤毛のセッターみたいにしてしまったわ」
イタリアの太陽が明るいので、赤く染めたその髪の毛も、先端までいくうちに、もとのネズミ色を隠しおおせなくなっていた。
「いいですよ、かまいませんよ」
コックリルは不きげんな顔で、なんということなしに、袖をはらった。それから彼は、女のそばを離れて、傾斜したままの通路を、あぶなっかしい足どりで通りぬけた。昇降口から、飛行場専門の小型バスへと向いながら、自棄(やけ)になったような気持で考えていた。
——この女も、あの連中といい仲間だ！
いよいよこれから、観光旅行社主催のイタリア旅行がはじまるというのに、彼の気の重さはくわわるばかりだった。といって、会費は全額払ってしまったので、いまさら取りけすこともできない。最初、旅行社の受付では、たとえ一人旅でも、けっしてお淋しい思いはさせませんと保証してくれた。出発しさえすれば、同行の客のうちに、けっこう気のあった相手が見つかるというのである。しかし、現実の結果はどうであろうか。話しあう一人ひとりが、そのたびに資格を失って脱落していくばかりなのだ。彼としても、憂鬱にならざるを得ないではないか。
——あの女も、ほかの連中と似たりよったりさ、と彼は思った。どいつもこいつも、おなじようなものだ。
「おどろいたわ！」ルーリーもおなかのなかでいっていた。
「なんてまた、変った男なんでしょう」
それにしても、よくもまあ、ああもすばやく、わたしの髪に気がついたものね……おどろくというより、彼女はむしろ考えこんでしまったくらいだった。
腕いっぱいに、つるつるすべる雑誌をかかえこんで、通路をどうにか歩きながら、なんとか早く、むかむかするこの気持を忘れたいものと考えていた。高いところへ昇ると、いつもきまって、こうした気持になる彼女だった。
あの洗剤は、ものすごい効果だという宣伝だった。たしかあの広告文句は、《ヴォーグ》誌かなにかで見つけたのだ。
——卵の黄身に混ぜておつけください。ご希望とあれば、日に六回でも、お髪の色を変えることができます。卵のにおいだけは我慢していただきますが——
彼女は、どうにか、バスに乗りこむことができた。席をとったとたんに、またしても、雑誌を床に落した。あわてて

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ひろい集めにかかったが、バスの腰かけの下というものは、こういう動作にはたいへんぐあいのわるい場所だ。そこで彼女は、あらためてまた、雑誌のグラビアに目をとめた。けばけばしいほど派手な、いわば《魚市場（ビリングズゲート）》風といった肩かけが写っているのである。

写真といっしょに、つぎのような記事がのっている。――フリントンからきた漁師に頼んで、さかな網をすこし分けてもらいなさい。タールを洗いおとし、端をかがって、まっ白い玉かざりを付けます。できあがったら、できるだけ無造作におかけください。麦わら帽は、大きめのほうが釣りあいます。

若い女の写真は、むろんロンドンのスタジオ内で撮ったものだ。背景の絵はカプリ島。肩へさかな網を、記事の文句どおり、無造作にひっかけている。なんともいえず小粋なスタイルだった。もっと早く、見ればよかったのにと思った。

いま彼女がかけているショールも、おなじ雑誌の、もうすこしふるい号でおそわった。記事のヒントにしたがって、西サセックスのボクナーにいる伯母さんから、赤いシェニール糸のテーブル・クロスを譲ってもらった。お茶だのインクだののしみを洗いおとして、そのまわりに、まっ白な玉かざりを縫いつけた。

彼女はそれを、この旅行にも持参して、こうして無造作に肩へかけている。それにしても気候が暑すぎる。とりのけてしまいたいと、からだを揺すった瞬間に、またもや例のすべっこい雑誌を、一度に全部、床の上にぶち撒けてしまった。あいにくバスが動きだしたところなので、雑誌はすべって、前の腰かけのほうへ飛んでいった。セシル氏がちょっとのあいだ、書類入れを席において――赤い小型のやつで、よほど大事なものがはいっているとみえて、片時も手から離したことがないのであるが――そのときばかりは席において、かがみこんでひろってくれた。

セシル氏は彼女と、ロンドンの飛行場で落ちあったときから、ルーリーに目をつけていたのだ。なんというすばらしい女だろう。服装のこのみだってすてきじゃないか。流行品を身につけるすべを、この女は小憎らしいほど心得ている。幅広のサーキュラー・スカートだって、まだ廃（すた）ったというわけではない。白かなきんの肩なしブラウスにいたっては、目下上流社会で流行中だといってさしつかえない。それにしても、この肩かけをどこで手に入れたのだろう？なんとも見事な深紅色じゃないか。その赤毛にこうもよくうつるものを選んだのは、インスピレイションといっても

よいであろう。
「結構なショールですな。なんともいえない色あいで――ハートネルでお求めですか？」
「いえ、いえ、ちがいますわ」ルーリーはいった。「あそこにも、よく似たのがありましたが、これはそれとちがいまして、わたしの伯母の子供部屋にあったテーブル・クロスなんです。廃物利用もおもしろいだろうと思いましたので――」
そして彼女は、つけくわえていった。この品の唯一の欠点というと、こうした南の国では暑すぎることですと。
「だが、それだけの値うちは充分ありますよ！」
セシル氏はいった。今年の彼が、お得意さんに勧めたのは、トワール・ド・ヴィシーだった。はげかかったような空色のコットン地で、元来はフランスの労働者階級が着用するものだが、やはりシーズンの終りごろには、相当に飽きられてしまっていた。
「わたしは、あの、セシルなんです。そら、ご存じでしょう。クリストフ衣裳店のセシルですよ」
いいながらも彼は、そっとパスポートを、ポケットの奥に押しこんだ。セシル・ジョージ・ブラウトの名を知らせるのに、パスポートまで見せるのは、はしたない仕業であろう。
「で、あなたは？」
「ルーヴァン・バーカーと申します」
ルーリーはすこし、頬を染めていった。
セシル氏としても、聞きのがせる名ではなかった。その名を聞くまでは、この女をなんと思っていたか？　身分はよいが、はねっかえりのお嬢さん。月々親からもらう小遣いが足りないばかりに、いま流行のアルバイトでもやってみようかという、あの歎かわしい女性のひとりと思っていたのに――
ルーヴァン・バーカーとは知らなかった！
「そうでしたか。わたしはご著作のファンでして、全部拝見しております。ベッドのそばに、欠かしたことがないんです。ええ、ほんとですとも。しかし、驚きましたね。ずいぶん、お若い！」
「二十九ですわ」
悲しそうに、ルーリーがいった。世間に名が出てから――そうだわ。もう十年になる――年齢を隠すわけにもいかないじゃないの……
「来年は三十の声を聞きますの。情けなくなりますわ」
「まだまだ、そんなことをいうお年齢じゃありません。そ

れは三十二にでもなってからのことです。わたしみたいにね」

セシル氏は世間に出てから、すでに二十五年経っているのだが、年齢のことなど、一度も口にしたことがないのである。金色の髪の毛を、長くて白いので有名な指で掻きあげた。

「それにしても、高名なバーカーさんにお目にかかれるとは、光栄のいたりですな。生ま身のあなたにお会いできたんですからね。これで、わたしはもう、言葉が出ないくらい興奮しているんですよ」

彼はちょっと、肩を揺すった。生ま身とある以上、セシル氏にとっては、なによりもまず、それを美しく包まなければならない。それもできるだけ早く、できれば、トワール・ド・ヴィシーで……

「あなたの売りだす話、おうかがいしたいですな。ねえ、いいでしょう？　聞かせてくれませんか。できるだけその――」

できるだけくわしくというところを、最後だけぼかしてしまうのが、彼の最近の気どり方だった。これがたちまち、野火のようにひろまって、メイフェアのお嬢さんたちのあいだに流行しだした。彼女たちのあいだに、セシルさんがいってたわという言葉が通用するうちは、彼の口ぶりを真似てくれることもりっぱな宣伝だった。そのあいだ、クリストフ衣裳店に客は絶えないのだ。

うれしいことに、ルーリーがさっそく、そのお嬢さんたちの仲間入りをしてくれた。最後までいいきらぬ語句をつらねて、彼女は早口にしゃべりだした。小型バスが飛行場の草むらを走りすぎるあいだに、彼女が文名をはせるまでのいきさつを、あらかた語りおえてしまっていた。セシル氏が適切にいったように、ミス・ルーヴァン・バーカーが世に出るまでの話である。

「わたしの最初のご本は、十九のときに出しました。そのころのわたしときたら、どんなに世間知らずの娘だったか、ご想像もつかないと思いますわ。わたしの出版者なんか、いまでもそのことで、わたしをからかおうとしますのよ。はじめてわたしが、出版書肆を訪ねたときのことですけれど」

実際、セシルは興奮でわれを忘れていた。

「そう、そう。存じあげておりますとも。カニングトンの口から、何度その話を聞きましたことか。いまだにあの男は、晩餐の席での話題に、そのときの模様を持ちだすんです！　なんにもおっしゃらなかったそうですね。ネズミみ

たいに、黙りこんでおられるんで、なんとか、ひと言でもしゃべらせようと、あの連中もずいぶん骨折ったらしいんです。それがとうとう骨折り損におわったと笑っていました。あまりにもシャーロット・ブロンテすぎたというわけですね」

「ええ、わたし、石みたいに固くなっていたのです。ネズミみたいだったといってまして？——そうね。うまいことをいうものね。あのときのわたし、ネズミそっくりでしたわ。髪もネズミ色でしたし、声だってネズミみたい。そればかりか、ネズミみたいにびくびくした気持に、ほんのネズミ程度の勇気を出して……」

しかし、その後の様相は、完全に一変した。出版書肆は第一作を買ってくれたし、書評も信じられないほど好意的なものが多かった。おかげで、映画化されるところまで漕ぎつけることができたし、文字どおり、バイロン卿になったようなもので、一夜明ければ、新進作家としての文名が高かったのである。

「それからというものは、ネズミの勇気を、いっそうふるい立たす覚悟をきめました。ネズミのような、びくびくものの気持はつづきましたが、ネズミ色の髪もそのまま、ネズミみたいな声だって、だれがなんといおうと、わたしはそのまま、平気な顔でしゃべりつづけました。ちっとも気になんかしなくなりました」

そこまで話して、彼女は忠実に、言葉に修正をくわえた。

「われながら好きになれない声ですけれど」

そしてまた、そのさきを雄弁に語っていった。あまりたびたび話をさせられるので、すっかり暗記してしまったという調子である。言葉は、それと意識して探しだしてくるわけでもないだろうに、ピタッピタッと、適当な場所にはまりこんでいく。そのあいだ、彼女のこころは……

彼女のこころは、疑惑を解きほぐそうと努力していた。ロンドン空港を飛びたって以来、ずっと疑問に思いつづけていたのである。疑問の種は、かれら二人の三列前にかけている男のことについてだった。

バスは空港の建物の、大きなガラス扉の前にとまった。レオ・ロッドは立ちあがって、だれよりもさきに降りていった。バスの出口では頭がつかえるので、背中をまるめ、からだをよじった。右肩をぐっと、出しすぎるくらい前につき出して、からだにはずみをつけながら歩いている。

彼は歩みながら、なぜこんな団体旅行なんてくだらぬものに参加したのかと、後悔のほぞを噛んでいた。右を見て

も左を見ても、ぜんぜん知らぬ顔ばかりの新しい社会で、それがまた、彼のことをとやかくしゃべりあっては、頼みもしない同情を浴びせかけてくる。それも片腕しかないというだけのことに――新しい社会は、全員こぞって、彼のきげんをとりにくる。その片腕は、大戦でなくなされたんでしょうね。そういわれると、彼はいつも、胸がむかむかしてくるのだった。唾でも吐きたい気持になって、いいえ、奥さま、これはさる田舎道で、自転車から落っこったのが原因なんですよ。……ところが、ますます腹の立つことには、彼のその言葉を、ひとりとして、信用するものがないのである。

妻のヘレンは、夫のすぐ前を歩いていた。ほっそりとして、背丈が高く、優雅な態度で、女王のように、慎しい品のよさをそなえていた。忍耐づよく、思慮があり、無言のうちに同情をしめし、仮借ない親切をあらわす――いまもヘレンは、自分の旅行カバンのほかに、夫のスーツケースを提げていた――むろんそれは、夫に片手がないからである。

「運びたいんだから運ばせておけ」とロッドは考えていた。「おれだって、持てないわけじゃない。あんなしろものぐらい、いつだって運んでみせられるのだが、そのためには、夫婦のあいだに、荷物の奪いあいをはじめなければならぬ。あんまり見よい図でもないからな」

スーツケースのなかは、スクリャービン（ロシヤの作曲家、ピアニスト）のノクターンの楽譜――それは彼のために、左手用に編曲されてあった――それとスコッチ・ウイスキーが一壜、イタリアの田舎では、とうてい入手できまいと考えたからであるが――そのほかにはなにもない。

ヘレンはふりかえって、夫の顔を見ていった。

「あのひとが、こちらへきますわ。わたしたち、顔をあわせることになりそうよ」

「だれがくるんだって？」

「あの女のひとよ」

「そうか。でも、べつにこっちが、避けなければならぬわけもなかろう」

「あら、そうでしたの？　でもわたし、あなたはあのひとを、おきらいなんだとばかり思っていましたわ」

ヘレンの両腕は、ふたつの荷物の重みで、アーチ形になっていたが、それでもべつに、それと気づかせるような態度はみせなかった。

「それはそうさ。ぼくはあの女が大きらいだよ」レオはじりじりするようにいった。「あの女にかぎらず、髪を赤く

染めたり、爪の上にもうひとつプラスティックの爪をつけたり、ゴムのブラジャーを着けたりする女は、だれであろうときらいなんだ。そのうちでも、とくにあの女がいやなのは、つけ睫毛の目で、ぼくの片腕をじろじろ見ては、女らしい同情的態度でふるまおうとするからなんだ。といっても、逃げだすわけにもいくまい。これからはあの女と、イタリアじゅうを歩きまわらなければならんのだからな」

「たぶんあのひとは、わたしたちといっしょの行動はとらないと思いますわ」

「気やすめをいうもんじゃない！　あの女だって、ほかのだれだって――みんなそろって、きみの団体旅行の仲間じゃないか」

「わたしの団体旅行じゃありませんわ」

笑いながら、彼女はいった。

「ぼくがきたがったので、出てきたといいたいのか？」

「ただ、お父さまがそうお考えになったので……」

「お義父さんが、ぼくのことを放っておいてくださるといいんだ。ぼくはなにも、ぼくの精神上の健康にまで干渉してくださいと頼んだことはないんだ」

そのじつヘレンの父は、娘の精神上の健康こそ気にしてはいたが、それ以外の人間については、だれであろうと、まったく頭においていなかったのだ。

「お父さまはただ、イタリアがそのために、いちばんよい場所だとおっしゃっただけですわ。なぜって、ここでしたら、わたしたちにも、自由にお金を使うことができるんですもの」

「つまり、きみがここで、自由に使えるからなんだな。ぼくのほうは、使う金なんか持っていない。――ぜんぜん残っていないんだから」

「そんなこと、どうでもよいじゃありませんか」彼女はいった。「お金なんか、問題にすることはありませんわ。わたしたち二人が暮らしていくだけのものは、充分ありますもの。お父さまだって、わたしたちが旅行でもしたら、気晴らしになるだろうとお考えになっただけですわ」

「団体旅行でか」レオはいった。「いやはや、というところだ。まあ、あの連中を見てみるがいい」

この一行は、観光旅行団体のメンバーがもつ特徴を、非常によくあらわしていた。総員は三十名だが――朗らかに陽気なのから、浮き浮きと騒ぎたてたり、明け暮れ俗悪な言動をつづけるのが一団。こうした手あいを、軽蔑的な目で見ているお上品な連中が一団。この部類に属する人たち

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com